



水の思い出 ④④

春になると、近所の堤防の上を歩きたくなる。冬の間は茶色に枯れた草に覆われていた堤防が、若草の緑色や菜の花の黄色、川沿いに生えたネコヤナギの白といった鮮やかな春色に変わっていくからだ。最近ではサイクリングをしている人々を多く見かけるが、晴れた日には自分もどこかへ出かけたくなってしまう。

堤防から見える川は山田川だ。昔はもう少し川幅が広がった気がするが、自分が大人になったからだろうか？子供のころはよく川岸で、石を投げて水切りしたり、飛び跳ねる魚を捕まえようと悪戦苦闘したものだ。結局、川で魚を捕まえたことはないが、意外な生き物と出会ったことがある。

それは数年前、犬を連れて堤防を散歩していた時だった。先を歩いていた犬が突然、草むらに向かって吠えだした。猫や鳥が隠れていると吠えることがあるので何かいたかな、と思って近づいてみた。吠えていた先に目をやると、そこには丸い石のような物体が。よくよく見るとなんとそれはカメだった！大きさは15cmほどのカメが、手足を引っ込めて丸まっていた。川からは10メートル程距離があるし、誰かが捨てていったのだろうか。何にせよカメが向かっていた方向は民家がある方向だし、ここまで歩いて来た(?)カメには悪いと思ったが、川に返してやることにした。久しぶりに川岸に降りて、川の中に放してやると元気に水の中を歩いていくカメ。しだいに見えなくなっていくその姿に「浦島太郎」を思い出したが、もちろんカメは恩返しに帰ってこなかった。無事に竜宮城にたどり着けたのだろうか？今も堤防を散歩していて大きな石を見つけるとあのカメを思い出す。

(藤田町 萩谷 浩司)

春の歴史散歩のすすめ

ひかりあふれるふるさとの道、地名の由来や歴史を尋ねて「歴史散歩」はいかがでしょうか？道案内に最高のテキストをご紹介しますながら「ふるさと散歩」をあわせてお勧めします。ご紹介した冊子はふるさとを愛する多くの方によってつづられたものです。失われてからでは遅い貴重な資料を丁寧に集め編纂した方たちのご苦労に頭が下がります。

(高橋靖浩・相原早苗・塩原慶子)

「さかさ桜…下向きの桜」

むかし、1490年代の武将「信太小太郎」が小田部合戦のときあやまって馬を深田の中に乗り入れて動けなくなってしまった。小太郎は、馬を助けようとして持っていたムチを田の中にさかさに投げ捨て馬を助け上げ山田川の信太ヶ淵を渡ろうとしておりからの洪水のため馬もろとも流されて溺死して中染の西足に流れ着いた。村人は、哀れに思いその地の山麓にお墓を建てて供養した。小太郎の投げ捨てたサクラの木で作ったムチは逆さまに根づいて、今でも桜の花が下向きに咲くそうです。その桜の木は昭和60年(1985)に田の基盤整備で山田川の岸边に移し替えられ、またムチが逆さに突き刺さったためその後の育ちが悪いと言われているとのこと。



さかさ桜

「金砂のモチの…糞尿をしない馬」

東金砂神社、[大同元年(806)建立]社務所の庭に樹齢500年になるモチの古木(御神木)がある。その古木につながれた馬は糞尿をしないという霊験あらたかなモチの木である。

このモチの木には、もう一つの逸話があるという、それは水府村和久地区の某氏は田植えの時、隣の田のうるちの苗を自分の田に植えてしまった。それを隣家から指摘され、何とか言い逃れを考え「うるち米からモチ米」に変えて下さいと神社に心願した、その願いがかなって収穫時モチ米になり難を逃れたことからそのお礼のためモチの木を奉納植樹した、その後その人は毎年ご参拝し餅を献上しているとのことでした。



モチの木

その他七不思議に「釣りし堂…枕かえ」、「高陽入り…^{こぜ}警女の鼓」、「御所山の井戸…地下の人声」、「おっかな淵…七色の水」、「金砂の蛙…鳴かない蛙」、等がありますが、残念ながら現在そこは身軽に行けそうにない場所とお話しでした。

[出典：水府村の歴史散歩・水府村の民話]



今回いろいろな話を聞くことができ、この常陸太田市は、水府、金砂郷以外にも、いたる所で金(きん)にまつわる逸話や地名が沢山あるのを知りました。現在農道になっており通り抜けできないが昔は本道で「塩」の道だった話など、余裕ができたならこれらについて調べ歩いて見たいと思う今日この頃です。

(高橋 靖浩)



軽尽坪から守金へ

小菅地区の南端にある守金坪、元は軽尽坪(かるつくし)と呼ばれていたそうです。働いても働いても楽にならないのは、地名が軽尽なので、お金やものが「軽い」のではと。話し合いの後、いろいろなものがたまるようにとの願いから「守金」になったと伝えられているとか。

笠石

新たに開墾・開発された田を新田と呼びますが、当初「十石新田」と称されていたのを、「笠石新田」と改称したのは水戸光圀の命を受けた岡見氏だそうです。新田集落のはずれに大きな石の上にさらに笠の形をした石がのっていることが地名の由来。出典の里美の歴史散歩には水戸領内地誌の付録にある笠石の図も載っています。

(出典:里美の歴史散歩)

鬼渡り沢

小妻のある沢は「にわたり沢」と呼ばれていますが、昔は「鬼渡り沢」と呼ばれていたようです。ここは時折増水などがあると上流から大きな石や土砂が大量に流されてきて大きな被害があり、その様子を見た村人が「まるで鬼が渡り歩いたようだ」といったことから鬼渡り沢というようになったと伝えられています。

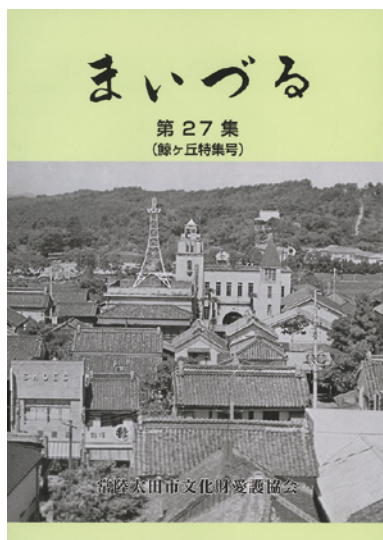
しんめんめ

むかし小妻の鎮守天満宮参道近くに湧き水がありましたが、冷たい水で稲も収穫できないことから年貢免除されていたとか。村人たちは池や堀を作って水をぬるませる工夫を続け、やっと稲を収穫できるようになり新たに年貢がかせられるようになって「新免田」と呼ばれるようになりました。その時のため池は「新免」前のため池と呼ばれ、しだいに「しんめんめ」とこの池を呼ぶようになったのだそうです。ため池はなくなりましたが地名は新免前に残っています。

(出典:里美むかしむかし)



やさしそうなお地蔵様の笑顔が印象的な「里美むかしむかし」は里美に伝わる民話を収録したものです。小さなお子さんにも親しみやすいつくりになっています。



右: まいづる(常陸太田市文化財愛護協会発行 300円)

最新号である27号から販売されるようになりました。特集は「鯨ヶ丘」。

左: ふるさと写真帖(里美村教育委員会発行 1500円)

貴重な写真満載です。

西金砂歴史散歩のすすめ^{よしむと} 菊蓮寺住職 安西 仁人さん



■おびんずるさま

木造千手観音立像（茨城県指定文化財）や木造不動明王立像・木造多聞天があることでも知られている菊蓮寺。本堂の奥に、昔の庶民の信仰の様子がうかがわれる「おびんずるさま」が座っていらっしゃいます。けがや病気を治してくれると、なでたり時には削りとり煎じて飲んだりされたといひます。人々の手でさすり続けられたその木肌は、木目もつややかさに、昔の人々の祈りを感じさせられます。



■ギャラリー菊蓮寺

ご住職の安西さんは太田一高の美術部OB。元は学校の先生をなさっていました。「英語の先生になろうかと思っていたのですが、なんだか英語より絵を描きたくなくて」、美術の授業を受けた思い出を持つ方も多いのではないのでしょうか。

また、ある小学校赴任中は相撲クラブを立ち上げたこともあるそうです。先生在任中40名近くのお子さんが夢中で相撲を楽しみ、「相撲に対する見方が変わった。そん

なに楽しいものだったのかと子供の様子から教えられました」と話す保護者の方もいます。

本堂奥から広間へと続く廊下や部屋に作品が飾られています。「ギャラリー菊蓮寺なんて言われて、照れくさいです」



■「集中力です」

隔月で写経・写仏教室も行っているそうです。「難しくはありません。お手本の上に紙を重ね、透けて見える文字や仏像の形をただひたすらに写していくだけです。ほとんどの方が1時間くらいで仕上げて帰られます」とのこと。「無言でただただ文字を書く、みなさん集中力はすごいです」「筆を持ったことがなくても心配要りません。筆ペンでも大丈夫」と聞くと

私も参加したくなりました。

■にゅうじょうさん

菊蓮寺には^{けいさつ}問察上人というお坊さんにまつわる民話が伝えられています。安産守護の誓いをたてて生き入定（生きながら仏様になること）した上人。いつしか「にゅうじょうさん」と呼ばれるようになり、昭和62年には地域の方たちの協力が入定した地に入定尊霊廟が建て替えられました。

（右ページ参照）

入定日は3月3日、お母さんと子供たちの幸せを願った日はひな祭りの日でもあり、甘酒の振る舞いもある入定尊参りという安産守護の法要が、今も3月3日に行われています。



昭和47年ごろの菊蓮寺

写経・写仏教室

原則として奇数月の最終土曜日に行っています。

時 間 午後2時～4時

参 加 無料

持ち物 文鎮・下敷きなど

問合せ 菊蓮寺(76)9244

初めてお会いした時は中学校の美術の先生、笑顔たっぷりの話し方は変わっていませんでした。ギャラリー菊蓮寺には素敵な絵がいっぱいです。歴史散歩の折にはぜひお立ち寄りになることをおすすめします。（塩原慶子）

菊蓮寺周辺の歴史散歩



①愛宕神社本殿
礼大祭は6月24日



②愛宕神社前の巨岩
不思議な形をしています



③大神宮の山桜
樹齢350年くらいといわれています



④金砂の湯のしだれ桜
こちらは樹齢100年といわれるしだれ桜



⑤三島神社 戦争中は子供達はここで勉強をしたそうです



⑥入定尊 お産の神様です



⑦こうもり穴
昔、石を切り出した跡



⑧昔、田に水を引くために使っていた水路

ご自宅の物置に眠っていませんか？

ひな人形を集めてます

常陸太田市商工会女性部太田支部では、鯨ヶ丘のにぎわいづくりのために、ひな人形を集めています。

大切な人形だから捨ててしまうのは心が痛いけど、物置がいっぱいで困っている。

そういった方はぜひ寄付をお願いします。

こいのぼり・五月人形
も集めています!!

◆下記のようなひな人形大歓迎です◆

- ◎段飾りなのに全部揃っていない
- ◎五人囃子が三人囃子になっている
- ◎ちょっと汚れている
- ◎段飾り、親王飾りなどの種類は問わ



**まずはご連絡
下さい!!**

常陸太田市商工会
女性部太田支部

〒313-0061 常陸太田市中城町3210
TEL:0294-72-5533/FAX:0294-72-5546

「生涯学習情報誌フォonz」に 広告を掲載しませんか？

◆申込資格

- 常陸太田市、日立市、北茨城市、高萩市、常陸大宮市、那珂市、大子町または東海村に事業所、店舗等を有する方
- その他、常陸太田市フォンス・ネットワーク会長(以下「会長」という。)が適当と認める方

◆掲載できないもの

- 法令等に違反し、または抵触するおそれのあるもの
- 公の秩序および善良な風俗に反するもの
- 政治活動、宗教活動、意見広告または個人の宣伝に係わるもの
- 青少年の教育上好ましくないもの
- そのほか、生涯学習情報誌に掲載する広告として会長が適当でないと認めるもの

◆ 廣告掲載号

平成21年7月～平成22年4月までに発行予定
の第46号～第50号(2～3ヶ月毎発行)

◆広告料(1回あたり)

会長が指定するページの最下段

- ①縦4.5cm×横17.9cm／20,000円
②縦4.5cm×横 8.8cm／10,000円

◆申込方法

生涯学習センターに備え付けの申込書に必要事項を記入し、原稿を添えて申し込んでください。

◆申し込み・問合せ

フォンスネットワーク事務局(生涯学習センター内)(0294-72-8888)

【広告イメージ】

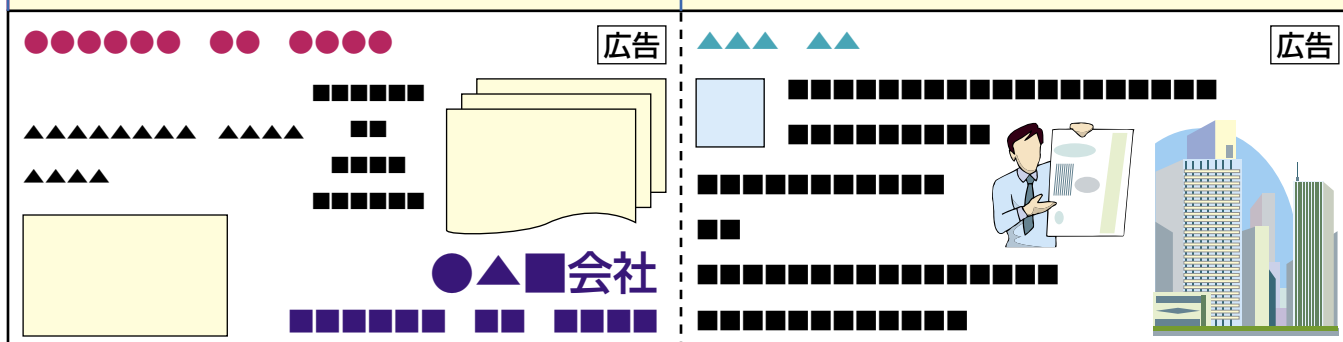
◆大きさは原寸大

◆色はカラー

◆掲載はページの最下段

【例1】 縦4.5cm×横17.9cm／20,000円

【例2】 縦4.5cm×横8.8cm／10,000円





『鶏を飼うこと』

我が家では庭先で9羽の鶏を飼っている。エサはクズ麦と米ぬか、わずかな魚粉・カキガラと畑からの野菜クズなどの身近にある材料で育った鶏は、私たちに卵を与え、おまけに残飯を無駄なく食べて肥料に変えてくれる。農園の循環の輪の中で大活躍の存在だ。そして、この鶏たちも、卵を産む役目が終わると、今度は肉として私たちのお腹に入ることになる。我が家では養鶏担当は母ちゃんなので、最後をみとるのもやはり私。そして、我が家の子供たちもそばで見守る中、今までお世話になったコッコちゃんに感謝をこめつつその命を絶つ。

まず首の動脈を切る。思い切りよく切らないと苦しいので、ここが肝心。命の重みを感じると同時に、腹がすわる。それから、煮えた湯の中に入れ、毛をむしり、首と足を切る。そうすると、よく絵本にでてくる鶏の丸焼きの姿になる。はじめは顔をそむけどここに行っていた子

供たちも、その姿になるといつのまにか「美味しそうだね」なんて言っている。

それから腹をさいて内臓を出し、肉を切り分ける。その肉にもまだ骨や筋が残っていて、生きていた証が生々しく残っている。スーパーできれいにパックされ売られている肉とはまるで別のもの。心臓も肝臓も砂肝も全てきれいにとって、最後に残る骨も鶏がらとして煮込んでスープにする。

こうして鶏をさばいた日の夜は、家族みんなで鶏の生命に感謝しながら、おいしいね、おいしいね、といただく。うちのコッコのお肉は硬いけど、味があって、とびきりおいしいのだ。そして、何よりも命に感謝していただく、ということを手でなくわかる。はっきり言って鶏を絞めた当日は、さすがにあまりすぐ食べる気はしない。でもその命の重みを噛み締めて、普段は豚だ牛だと飽食の恩恵にあずかっている自分を戒めつつ、食べる。そのことで見えてくるいろんなことも、鶏を飼うことの意味のひとつだと思っている。

(木の里農園 布施 美木)



子育て奮闘記

踊るママパラダイス 44

明るくて、返事や挨拶がきちんとできる。発表や司会がとても上手。だけど、甘ったれて、案外打たれ弱い。高校生のお姉ちゃんの待遇や持ち物がうらやましくて、早く大きくなりたい。それが、我が家の末っ子、ゆきの。4月から6年生です。

一番上のスミレ、一人息子のユースケ、末娘のゆきの、どの子も同じように可愛いのです。以前、書いたと思いますが、愛情は一つを分けるのではなく、どの子にも一つずつと考えています。

ゆきのは、大変しっかりしているように見えますが、幼稚園の頃から、運動会やマラソン大会の前など、ちょっと友達とうまくいかない時、「行きたくない病」にかかっていた。「おなかが痛い。」「息が苦しい。」と言う時もあれば、「あの子がいじめるから。」と言う時もあります。たいてい一日二日で登校するようになるので、体の不調を訴える時は休ませていましたが、こういう時の対処法は難しいなと思います。逃げる子になってしまわないが、いや、辛いと言う気持ちを大切にすべきが、と。

自分にも逃げ出したい時があります。それでも、何とか立ち上がってきたから今がある。ゆきのにもそうあって欲しいと思いますが、子どもは私と同じではないので、話は聞いていきたいと思っています。

最近は、「朝泣き」が減ったのでちょっと安心。6年生になって、張り切るゆきのには、頑張りすぎるな、とハラハラしているのも幸せなのでしょうね。

—— わいわいネット 織田 裕子 ——

「おませさん♥」って笑えばいいのかな



リレー
エッセイ「思い出の絵本」『にげだしたおばけやしき』 ～44～ (大里町 鈴木 りか)

「おばけやしき」と聞くと、皆さんはどんなことを想像し、どんな気持ちになりますか。子供の頃は皆そうだと思いますが、怖いと思う反面、どこか好奇心を駆り立てられる世界で、私もドキドキ、ワクワクしたものです。

そんな私が小学4年生の頃、母親の実家近くの書店で出会ったのがこの「にげだしたおばけやしき」の本だったのです。このお話は、原題を「ひまわり通りの家」といって、ドイツのシュパンクという作家が書いたものです。表紙の黒塗りに黄色い題字と、あまり見慣れない外国人の挿絵がとてもインパクトがあり、一目で気に入ってしまいました。母親にせがんで買ってもらった私は「なぜ、おばけやしきが逃げ出してしまうのだろう」という疑問を早く解きたくて、一字一字ていねいに読み進めていきました。主人公の「ビュンベルリさん」というユニークな名前と風ぼう、彼の先祖代々から受け継がれてきた古いけれど趣のある洋館が、挿絵とマッチしていて、私の心を引きつけていきました。しかも、この古い家には秘密があったのです。それは、この家がまるで人間のように感情をもち、主人を様々な災難から守ってくれるすばらしい家だったのです。しかし、当の主人は全くそんなことは知らず「今どきこんな古い家はもうはやらない」と、この家を手放す決心をします。それを知った彼の家はとても悲しみ、売られないようにと行動を起こすのです。

私も幼い頃から使ってきたぬいぐるみやおもちゃ等には愛着があり、今でも実家に置いてあります。この本もその一つですが、時々6才と2才の娘たちが見たり、おもちゃで遊んだりしてくれます。娘たちにもこのおばけやしきの気持ちが伝わったかな？と感じるこの頃です。

(次回は 山下町 於曾能 幸枝さん)

にげだしたおばけやしき



シュパンク 著 しむやたろう やく おおだじゅん 監

ちあつとひといき ランチカフェ「Green Time」

竜神ダム入り口近くの小高い丘の上にすてきなカフェができました。大きな窓から見える山々の景色と、薪ストーブとアジアン家具のある店内の雰囲気心が癒されます。このお店には毎日同じメニューはありません。「今日のお昼ごはん」という旬の野菜をたっぷり使った創作料理が日替わりで出てきます。私が訪ねた

この日は「春野菜の前菜三種・春の香りと彩りパスタ・サラダ・コーヒー」でした。毎日焼いている手作りのパンもお勧めです。「いい時間を過ごしていいね」そんなお店の方のことばが印象的でした。

・ランチ 1,000円 ・手作りパンいろいろ 1個 150円
下高倉町1820 電話0294-87-0868
営業時間 10:00～15:00(定休日水・木)



(菊池 幾子)

常陸太田の今昔 No.2 天下野宿(天下野町)

旧水府村を南北に貫く天下野街道のほぼ中央に位置する天下野宿は、徳川光圀公ゆかりの地として、また東西両金砂神社の祭りが行き交う街として古くから栄え賑わってきました。「天下野」の地名のおこりは、昔この地でおこなわれていた「ささら踊り」が人気を博し「天下一のささら踊り」というのぼりを立てて興行していたところ、「天下一とは畏れ多い」と役人に見咎められたのを、黄門様の機転で「これは天下野村で一番という意味だ」と助けられたからという話がいまも伝えられています。昭和30年代ころまでは「水府たばこ」の栽培が盛んに行われ、経済的にも大変

活気づき、遠くは太子や山方からも人が集まり、商業の街としても大変な活況をみせたようです。当時の天下野宿には、国鉄のバスが乗り入れ映画館まであったそうですが、30年代後半にテレビの普及とともに姿を消したそうです。平成15年に執り行われた大祭礼の歴



昭和26年頃

史に残る華々しさは、記憶に新しいところですが、今年3月には7年目毎に一度の小祭礼があり、久しぶりに多くの人々で賑わいました。天下野のシンボル東金砂神社の赤い大鳥居が今日も静かに街を見守っています。

(菊池 幾子)



現在

《お詫びと訂正》 前号(44号)5ページの「なつかしの井戸」の写真説明文で「カメラでつづった半世紀 関右馬状允アルバムから(財)日立市事業団発行」は「カメラでつづった半世紀 関右馬允アルバムから (財)日立市民文化事業団発行」の誤りでしたので、お詫びをし訂正いたします。